

夏の花

原民喜

晶文社



夏の花

一九七〇年七月三十一日初版
一九八一年六月三〇日一〇刷

著者 原民喜

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―一二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六一七九九

中央精版印刷・美行製本

© 1970 Tokihiko Hara

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社まで許諾を求めて下さい。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたしません

壊滅の序曲

夏の花

廃墟から

解説 竹西寛子

7

68

89

117

夏の花

三部作

わが愛する者よ請ふ急ぎはしれ
香はしき山々の上において獐の
ごとく小鹿のごとくあれ

壊滅の序曲

朝から粉雪が降つてゐた。その街に泊つた旅人は何となしに粉雪の風情ふせいに誘はれて、川の方へ歩いて行つてみた。本川橋は宿からすぐ近くにあつた。本川橋といふ名も彼は久し振りに思ひ出したのである。むかし彼が中学生だつた頃の記憶がまだそこに残つてゐさうだつた。粉雪は彼の繊細な視覚を更に鋭くしてゐた。橋の中ほどに佇たずんで、岸を見てゐると、ふと、「本川饅頭」といふ古びた看板があるのを見つけた。突然、彼は不思議なほど静かな昔の風景のなかに浸つてゐるやうな錯覚を覚えた。が、つづいて、ぶるぶると戦慄が湧くのをどうすることもできなかつた。この粉雪につつまれた一瞬の静けさのなかに、最も痛ましい終末の日の姿が閃いたのである。……彼はそのことを手紙に誌して、その街に棲すんでゐる友人に送つた。さうして、その街を立去り、遠方へ旅立つた。

……その手紙を受取つた男は、二階でぼんやり窓の外を眺めてゐた。すぐ眼の前に隣家の小さな土蔵が見え、屋根近くその白壁のところが剝脱してゐて粗い積土を露出させた寂しい眺めが、——さういふ些細な部分だけが、昔ながらの面影を湛へてゐるやうであつた。……彼も近頃この街へ棲むやうになつたのだが、久しいあひだ郷里を離れてゐた男には、すべてが今は縁なき衆生のやうであつた。少年の日の彼の夢想を育んだ山や河はどうなつたのだらうか、——彼は足の赴くままに郷里の景色を見て歩いた。残雪をいただいた中国山脈や、その下を流れる川は、ぎごちなく武装した、ざわつく街のために稀薄な印象をとどめてゐた。巷では、行逢ふ人から、木で鼻を括るやうな扱ひを受けた。殺氣立つた中に、何ともいへぬ間の抜けたものも感じられる、奇怪な世界であつた。

……いつのまにか彼は友人の手紙にある戦慄について考へめぐらしてゐた。想像を絶した地獄変、しかも、それは一瞬にして捲き起るやうにおもへた。さうすると、彼はやがてこの街とともに滅び失せてしまふのだらうか、それとも、この生れ故郷の末期の姿を見とどけるために彼は立戻つて来たのであらうか。賭にも等しい運命であつた。どうかすると、その街が何ごともなく無疵のまま残されること、——そんな虫のいい、愚かしいことも、やはり考へ浮ぶのではあつた。

黒羅紗の立派なジャンパーを腰のところまで締め、綺麗に剃刀のあたつた頤を光らせながら、清二は忙しげに正三の部屋の入口に立ちはだかつた。

「おい、何とかせよ」

さういふ語氣にくらべて、清二の眼の色は弱かつた。彼は正三が手紙を書きかけてゐる机の傍に坐り込むと、側にあつたギンケルマンの『希臘芸術模倣論』の挿絵をバラバラとめくつた。正三はペンを擱くと、黙つて兄の仕草を眺めてゐた。若いとき一時、美術史に熱中したことのあるこの兄は、今でもさういふものには惹きつけられるのであらうか……。だが、清二はすぐにボタンとその本を閉ぢてしまつた。

それはさきほどの「何とかせよ」といふ語氣のつづきのやうにも正三にはおもへた。長兄のところへ舞戻つて来てからもう一ヶ月以上になるのに、彼は何の職に就くでもなし、ただ朝寝と夜更しをつづけてゐた。

彼にくらべると、この次兄は毎日を規律と緊張のうちに送つてゐるのであつた。製作所が退けてからも遅くまで、事務所の方に灯がついてゐることがある。その露次を通りかかつた正三が事務室の方へ立寄つてみると、清二はひとり机に凭つて、せつせと書きものをしてゐた。工員に渡す月給袋の捺印とか、動員署へ提出する書

類とか、さういふ事務的な仕事に満足してゐることは、彼が書く特徴ある筆蹟にも窺はれた。判で押したやうな型に嵌はまつた綺麗な文字で、いろんな揭示が事務室の壁に張りつけてある。……正三がぼんやりその文字に見とれてゐると、清二はくるりと廻転椅子を消えのこつた煉炭ストーブの方へ向けながら、「タバコやらうか」と、机の抽匣ひきだしから古びた鵬翼ほうよくの袋を取り出し、それから棚の上のラジオにスイッチを入れるのだつた。ラジオは硫黄島の急を告げてゐた。話とはかく戦争の見とほしになるのであつた。清二はぼつんと懷疑的なことを口にしたし、正三ははつきり絶望的な言葉を吐いた。……夜間、警報が出ると、清二は大概、事務室へ駈けつけて来た。警報が出てから五分もたない頃、表の呼鈴が烈しく鳴る。寝呆け顔の正三が露次の方から、内側の扉を開けると、表には若い女が二人佇んでゐる。監視当番の女工員であつた。「今晚は」と一人が正三の方へ声をかける。正三は直ちかに胸を衝かれ、襟を正さねばならぬ気がするのであつた。それから彼が事務室の闇を手探りながら、ラジオに灯りを入れた頃、厚い防空頭巾を被つた清二がそはそはやつて来る。「誰かゐるのか」と清二は灯の方へ声をかけ、椅子に腰を下ろすのだが、すぐにまた立上つて工場の方を見て廻つた。さうして、警報が出た翌朝も、清二は早くから自転車で出勤した。奥の二階でひとり朝寝をしてゐる正三のところへ、「いつまで寝てゐるのだ」と警告しに来るのも彼であつた。

今も正三はこの兄の忙しげな容子にいつもの警告を感じるのであつたが、清二は『希臘芸術模倣論』を元の位置に置くと、ふとかう訊ねた。

「兄貴はどこへ行つた」

「けさ電話がかかつて、高須の方へ出掛けたらしい」

すると、清二は微かに眼に笑みを浮べながら、ごろりと横になり、「またか、困つたなあ」と軽く呟くのであつた。それは正三の口から順一の行動について、もつといるんなことを喋りだすのを待つてゐるやうであつた。だが、正三には長兄と嫂とのこの頃の経緯は、どうもはつきり筋道が立たなかつたし、それに、順一はこのことについては必要以外のことは決して喋らないのであつた。

正三が本家へ戻つて来たその日から、彼はそこの家に溼^たふ空気の異状さを感じていた。それは電燈に被せた黒い布や、いたるところに張りめぐらした暗幕のせみではなく、また、妻を喪つて仕方なくこの不自由な時節に舞戻つて来た弟を歓迎しない素振ばかりでもなく、もつと、何かやりきれないものが、その家には潜んでゐた。順一の顔には時時、峻しい陰翳が抉^あられてゐたし、嫂の高子の顔は思ひあまつて茫と疼^うくやうなものが感じられた。三菱へ学徒動員で通勤してゐる二人の中学生の甥

も、妙に黙り込んで陰鬱な顔つきであつた。

……ある日、嫂の高子がその家から姿を晦くました。すると順一のひとり忙しげな外出が始り、家の切廻しは、近所に棲んでゐる寡婦の妹に任せられた。この康子は夜遅くまで二階の正三の部屋にやつて来ては、のべつまくなしに、いろんなことを喋つた。嫂の失踪はこんどが初めてではなく、もう二回も康子が家の留守をあづかつてゐることを正三は知つた。この三十すぎの小姑の口から描写される家の空気は、いろんな臆測と歪曲わいまくに満ちてゐたが、それだけに正三の頭脳に熱つぼくこびりつくものがあつた。

……暗幕を張つた奥座敷に、飛きり贅沢な緞子どんすの炬燵蒲団こたつが、スタンドの光に射られて紅く燃えてゐる、——その側に、氣の抜けたやうな順一の姿が見かけられることがあつた。その光景は正三に何かやりきれないものをつたへた。だが、翌朝になると順一は作業服を着込んで、せつせと疎開の荷造を始めてゐる。その顔は一図に傲岸がうがんな殺氣を含んでゐた。……それから時時、市外電話がかかつて来ると、長兄は忙しげに出掛けて行く。高須には誰か調停者があるらしかつた——が、それ以上のことは正三にはわからなかつた。

……妹はこの数年間の嫂の変貌振りを、——それは戦争のためあらゆる困苦を強ひられて来た自分と比較して、——戦争によつて栄耀栄華をほしいままにして来た